世界旅打ち気分

●第46回・カリフォルニアのフェア競馬2場

須田鷹雄

プレザントン競馬場のレース風景

写真のカラー版は
https://www.instagram.com/sudatakaoshoten/の
#グリーンファーム会報#2022年6月号
でご覧いただけます

今回はアメリカから、フェア競馬の行われる競馬場を2つご紹介しよう。

以前にもファーンデイル競馬場やティモニウム競馬場でフェア競馬を取り上げているので繰り返しになるが、そもそもフェア競馬とはなにか、というところからおさらいしておきたい。

フェアとは、日本語だと共進会と訳されることが多い。アメリカの州や郡で年に一回行われるお祭りのようなもので、いろいろなイベントが詰め込まれている。手工芸品や農作物、家畜の品評会が行われたり、地元産品の即売会が行われたり、バンドが来てライブが行われたり、移動遊園地が来たり、内容や規模はフェアによってさまざまである。

そして、一部のフェアには競馬開催が付随している。競馬の規模やレベルもフェアによってさまざま。通常の競馬と同じレベルで場外発売されるものもあれば、ごく狭い範囲のみのサイマルということもある。

グリーンファームではかつて、バレッツ・マーチセールで購買した馬が募集されたことがあるが、あのセールが行われていたフェアプレックス競馬場（現在は残念ながら廃止）もフェア競馬の競馬場で、レースは秋のごく短期間のみ行われていた。

フェア競馬で行われるレースはサラブレッドの平地競走だけとは限らず、西部ではクォーターホース、東部ではハーネスレースもあるし、場所によってはアパルーサやペイントホース、ミュール（ラバ）のレースなどもある。最近は時代の流れというか競馬開催を止めてしまうフェアもあるが、ファンとしてはなんとか伝統を残していってほしいものである。

さて、今回ご紹介する競馬場のひとつ、プレザントン競馬場は、日本人のよく知る都市だとサンフランシスコが近い。サンフランシスコ国際空港から車で東へ1時間というところだ。

このプレザントンは、フェア競馬の中でもかなり立派なほうだ。同じ北カリフォルニアで行われている正規開催のゴールデンゲートフィールズとはさすがに格差があるが、一方で他のカリフォルニア州内フェア競馬よりは明らかに上の存在だ。

2022年は6月17日から7月10日までの間に開催が行われるのだが、6月23日と7月2日、7月9日には7．5万ドルのステークスが組まれている。メイドンクレーミング（未勝利戦で、公示された価格を支払えばそのレースの出走馬を購入できる）にはクレーミングプライスが4万ドルという「高級未勝利戦」もある。このあたりは小規模フェアにはない番組だ。

その一方で古馬のクレーミングレースにはクレーミングプライスが2500ドル（約30万円払えばレース後に出走馬を買い取ることができる）といった競走もあり、このあたりはフェア競馬らしい。他ではアラブのレースが何鞍か組まれている。開催中何鞍かあるが、最終的に行われるステークスは総賞金が6千ドルという小規模なもの。クォーターホースのレースは昔だともっとあったはずだが今年は1レースのみになっており、8千ドルのハンデ戦が組まれているだけのようだ。アラブのほうが馬匹資源不足だと思っていたので、クォーターホースのレースが少ないのは意外なことだ。

このプレザントン、サンフランシスコ旅行と日程が合うようならぜひ家族連れの方にレンタカーで訪れてみてほしい開催だ。競馬そのものももちろん楽しいが、お祭りとしての規模がデカい。移動遊園地ひとつとってもやってくる遊具のスケールが小規模フェアとは違うし、食べ物の出店などもかなりバリエーションがある。本物のポニーを使ったメリーゴーラウンドもあり、小さいお子さんのいる家族には特に向いている。

物販も見逃せない。さすがに買うわけにはいかないがジャグジーやちょっとしたプールを売る店などもあり、アメリカの邸宅とはそういうものかと感心させられる。一方で手工芸品を売る店などもあり、こちらは実際に買って帰れるアイテムも多い。筆者も馬の顔がデザインされた革のチェーン付きウォレットをここで買っており、いまでも海外旅行の際などに使っている。

今回ご紹介するもうひとつの競馬場がサンタローザ競馬場。こちらもカリフォルニア州のフェア競馬だ。

カリフォルニアのフェアはそれらの開催日程をまとめたウェブサイトがあるのだが、プレザントン、サクラメント、ファーンデイル、フレスノが収録されている一方、サンタローザ（ソノマカウンティフェア）はいつの間にかサイトから消えていた。そのためてっきり競馬が廃止されたのだと思っていたのだが、どうも存続しているようである。2022年は8月4～7日と8月11～14日に開催があるそうだ。

この競馬場には2006年にロケで行ったのだが、行ってみると自分たち以外にも報道陣が何人かいる。「こんな田舎の小開催に、なぜ報道陣が!?」と思ったら、それはミュールのレースに参加するクローンに関する取材の人たちだった。

ファーンデイルのときに書いたかもしれないが、ミュールについてはアイダホ大学の教授がクローンを作る研究をしており、クローンとして生まれたミュールたちが、その日の競馬でデビューすることになっていたのだ。ラバくらいの大きさの哺乳類についてクローンを作り、さらにそれをレースに参加できるくらい健康に育てるというのは難しいことらしく、それを取材するために競馬界ではなくクローン界から取材が来ていたというわけである。

我々の取材の競馬場のオフィスには勘違いされていたようで、「教授にインタビューする?」と聞かれたのだが、クローン技術の話なんて、英語どころか日本語でもよく分からない。丁重に辞退した次第である。

そのミュールレース、ひょっとすると廃止の危機にあるかもう廃止になっているかもしれない。コロナ前の2019年には行われているのだが、コロナ禍の始まった20年には各地のフェア競馬そのものが中止され、21年のレース結果を見るとサンタローザにしてもファーンデイルにしてもレースの存在が確認できない。さらに「アメリカミュール競走協会」のホームページを見ようとしても繋がらない。

もともとミュールは70頭くらいしか現役馬がいなかったうえにネバダ州の競馬場が廃止されたり、存続の危機にはあった。それでも他州で行われているアパルーサやペイントホースの競走よりは続きそうな雰囲気だったのだが、それも怪しくなってきた。今年の番組を見るのが怖いところだ。

サンタローザ競馬場のパドックを歩くミュール

プレザントンの馬券売り場は
一人前の競馬場と変わらない

https://www.instagram.com/sudatakaoshoten/